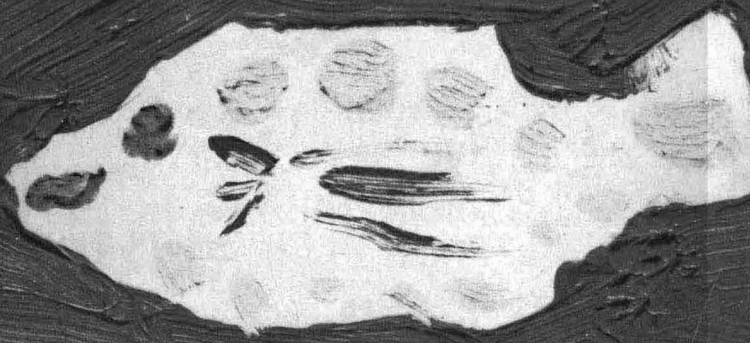
続 赤ちゃん誕生

林 房雄

続 赤ちゃん誕生

林 房雄



続 赤ちゃん誕生

昭和31年12月15日　第1刷発行　©　¥ 240

著者　林　房　雄

東京都文京区音羽町 3～19
発行者　野　間　省　一

東京都文京区音羽町 3～19
印刷所　豊国印刷株式会社
代表者　渋谷龍吉

発行所　東京都文京区音羽町 3～19　株式会社　大日本雄弁会講談社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。　（大進堂製本）

PRINTED IN JAPAN

目次

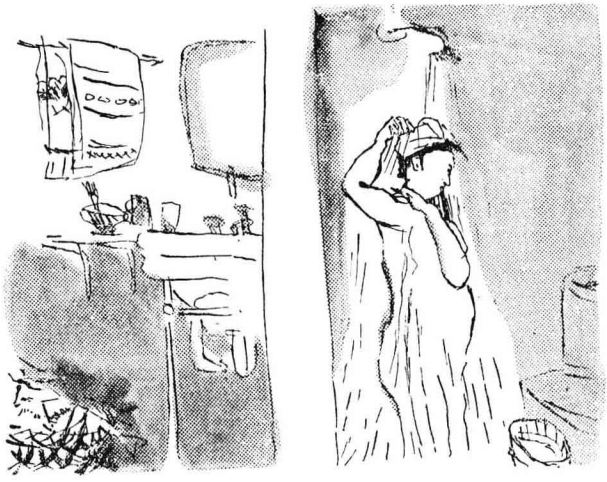
第九ヵ月目……五
罪のむくい……一九
平和の谷間……四四
前夜祭……六四
難破船……九三
真昼の幽霊……一一
夜の青空……一三〇
老父老妻……一五五
その日……一八三
誕生雅歌……二〇八

装幀
挿画

野間仁根

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

続 赤ちゃん誕生



第九ヵ月目

映画のセットのプランを書上げて、竹中プロデューサーに渡し、ギャラをもらつてしまうと、それで撮影所との関係は一応切れた形になつた。

光男は以前のとおり、大島建築事務所の忠実な社員にかえつた。久しぶりの東京、久しぶりの銀座のような気がした。事務所の窓からとびこんで来る都会の騒音もなつかしかつた。

会社勤めには、「創造の喜び」というような贅沢なものはないが、安定感がある。小市民の侘しい卑屈な安全感と言つてしまえばそれまでだが、しかし、それだけ気は楽だ。

美和子さんは、その後は別にピーナッツの食べすぎもやらない。下腹の球体が充実してくるにつれ

て、未来の母としての自信も拡大して来たようである。目下のところ、あまりに充実拡大しすぎて、妻の愛情とか女のお色気などというものは入りこむ余地がなく、棚上げの形である。

光男がうつかり良人の熱情を現わそうとすると、当然のことのように拒絶される。もちろん、寝室に入ることは許されない。つらい話だが、これもあきらめてしまえば、気が楽である。

待てばいいのだ。待つよりほかはない。妻は新しい生命の創造という大創作事業を行っている。それは芸術家以上の忘我と精神集中を必要とする。亭主という古い生命はここしばらく問題でない。しかし、新しい生命の創造が終れば、再び妻にかえる。前よりも更に成長し成熟した女になつて、亭主の腕の中で甘えたがるだろう。——その日を待てばいいのだ。

あきらめた光男は、妊婦の世話は富やと光右衛門老人にまかせて、

鎌倉——新橋
新橋——鎌倉

のおきまりコースを、無表情な振り子のように往復しながら、心のどこかで、性を忘れた男の平和な安定感を楽しんだ。

富やがどうして急に奥伊豆から出て来たのか、鶴次とかいう青年との結婚話はどうなつたのか、たずねて見たい気持は動かないではなかつたが、それも遠慮することにした。むりに聞けば、黒潮の匂いのする南国の原始的で直接的な「若き男女物語」の一節を拝聴させられそうだ。それも、光男の現在の心境には刺戟が強烈すぎる。さわらぬお色気にたたりなしだ。富やと美和子さんのあいだで完全に了解がついていて、元気な出もどり女中は毎日小まめに楽しそうに働い

ているのだから、余計な詮索は無用だろう。

光右衛門老人も、親子ミソギ事件以来、「行き過ぎ」を自覚したのか、すつかりおとなしくなつてしまつた。赤ちやんの誕生を見とどけるまで、ゆつくり腰をすえるつもりらしい。台所の仕事と部屋の掃除は富やにゆずつて、もつぱら庭の手入と畑仕事に熱中している。

畑には、トマトとナスの苗が葉をのばし、夏ダイコンがしげり、キュウリが花をつけはじめた。富やも手つだつて、せつせとコヤシをやるので、たいへん育ちがいい。あと一月もたつたら、八百屋の御用はいらなくなるかもしれぬ。

そして、二週間すぎた。——いよいよ第九ヵ月目だ。

あと五十日か六十日で、光男はいやでも自動的、自然的に、パパ、お父ちやん、オヤジの部類に編入されてしまうわけだ。

心の準備はとつくの昔にできているつもりだつたが、やつぱり、どうも、なんとなく落ちつかない。心臓のどこかが、むずがゆい。甘いような、酸つぱいような、形容のむずかしい気持だ。

事務所のデスクに坐つて、窓からとびこむ街の騒音を聞くともなしに聞いていると、自動車のクラクションが赤ん坊の元気な泣声に聞えて、はつとすることがある。そして、思わず、ニヤリと笑い、人に見られたわけでもないのに、ひとりで真赤になる。

夫婦というものは、おかしなものだ。新婚の当初は一心同体で、二人のあいだには絶対にすき間はない、とおたがいに思いこんでいる。独身時代は身も心も半分は空つぽだ。その空間にすつぽりとはまりこんで、甘い充実感をあたえてくれるのが妻であり良人である。

そして、時間がたつ。新婚気分は去り、充実感は次第にうすれて行く。良人も妻も、二人のあいだに新しく生じた裂け目と空間に気がつく。意地の悪い婦人雑誌に教えられて、二人はそれを「倦怠期」だと思いこむ。妻は良人の安酒とマージャン癖をうらみ、良人は妻の思いやりのなさを憎むようになる。

そして、ある朝、どちらかが先に——または同時に、発見する。

「ねえ、赤ちゃんがほしいわ」

「僕もそう思う」

「どうして、いままで出来なかったのかしら？」

「僕のせいじゃないよ」

「あたしのせいでもないわ。もっと努力しましょう」

「うん、努力することにしよう」

そして、また、ある朝。

「あなた、出来たらしいわ」

「えっ、ほんとうかい？」

「もう三月だと、お医者さまが言ったわ」

「なぜ、今までかくしていた？」

「だって自信がなかったんですもの。あら、いやよ、あなた、そんなにゆすぶっちゃあ。今がいちばん危険なのですって」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

良人と妻の胸に、透明な炎がぽつと燃えあがる。炎は静かに全身にひろがり、夫婦のあいだの壁をとかし、空間をぬりつぶして行く。

第二の新婚――いや、第二の婚約時代だ。幼子キリストの生誕までには、天の定めた十ヵ月がある。焦慮と期待の三百日間。

その三百日が、光男にとつては六十日に――いや、五十五日に、五十二日に、四十九日に……時間は時計よりも確実に正確にすぎて行く。

透明な胸の炎は、火勢を改めて燃えさかり、それがそわそわとなり、むずむずとなり、ニヤニヤとなる。

「おい、しつかりしろよ」

朋輩にぽんと背中をたたかれる結果になる。

そして、ある土曜日、忠実な伝書鳩のように寄り道をせず、光男が帰宅してみると、家の中が空つぽになつていた。

三度ベルを鳴らしたが、富やも迎えに出てくれない。

そんなはずはないと思つて、後庭にまわつてみた。

庭の一隅に、ちよつと意外な光景が展開していた。

麦わら帽子姿も勇しい光右衛門老人と富やが、コヤシ桶をかついで、せつせと野菜畑に運んでいる。それはたいして珍しくはないのだが、スリップ一枚になつた美和子さんが、去年の海岸帽子をかむり、キュウリの棚のあいだで、おかしな手つきと腰つきでクワをふりまわしている。本

来ならば、スラックスかショート・パンツをはくべき場合であろうが、胴まわりが去年のものでは間にあわない。何とも勇ましすぎる姿であつた。

光男は近づいて行つて、

「おいおい、大丈夫かい？」

「あら、お帰んなさい」

美和子さんはクワを杖にして、ゆつくりと上体をおこし、「きつとあなたが、そう言うだろうと言つたわ」

「たれが？」

「西山先生と金光寺さんよ」

「医者と坊主か。何の話だい？」

「運動が不足になつてはいけないの。強い子供を生むためには、妊婦には適当な運動が必要なのよ」

「それは解つているが……運動は結構だが、畑仕事は……」

美和子さんは光男の言葉を聞いていなかつた。

「あたし、安産のお守などには頼らずに自力で安産する決心をしたの。お父さまも大賛成よ」

光男は光右衛門老人の方をにらんで、

「お父さん、運動にも種類がありますよ。あまり無茶なことはさせないでください」

老人は返事の代りに、コエビシャクの中身を光男の足元にざあつと流した。

光男は横つとびにとびのいて、
「蛔虫の卵は皮膚からも侵入するそうです。赤ん坊が生れながらに蛔虫持ちになつてもかまいませんか？」
「お前の母親はお前の生れる前の日も、畑で働いていたわい」
老人は答えた。「わしは強い孫がほしいんや。弱虫の孫はいらんわい」
相手がコエビシャクを持つているのだから、議論するわけにはゆかぬ。
「美和子、僕は君の理性を信じたいね」
それだけ言い残して、部屋にかえり、念のために、書棚から「妊娠から出産まで」を取出して、もう一度読みかえしてみた。
「……一般に過激な運動、腹に力を入れる動作は行つてはいけません。下腹を冷すことは厳禁です。
自動車、汽車、汽船等の長距離旅行、坂道や階段を乱暴に上下すること、乗馬、ダンス、重い荷物を持上げること、高いところに手をのばすこと、冷水浴や海水浴、長時間坐つていること、洗濯等はすべて害があります。
特に、流産しやすい三ヵ月四ヵ月の頃、それから末期の九ヵ月目と十ヵ月目には避けなければなりません」
畑仕事をすることは書いてないが、してもよろしいという言葉はどこにもない。ダンスや洗濯さえ障りのある妊婦が重いクワをふりまわして無事なはずがない。

何か悪いことがおこらねばいいが！

翌日の日曜日は、光男が一日じゆう家にいたので、美和子さんも畑に出ようとはしなかつた。午後は、二人で仲よく材木座の海岸を歩き、滑川の浅瀬をわたつて由比ケ浜まで行き、夕食後は、光右衛門老人と富やを映画にやり、夫婦はラジオを聞いて、家庭的な宵をすごした。そして、おとなしく——つまり、二人別々に寝た。

ところが、次の日、一時間ほど早目に事務所の仕事を切上げて帰宅した光男は、裏庭の野菜畑に美和子さんの姿を発見してびつくりした。

また働いている。しかも、今日は服装まで本格の百姓姿であつた。麦わら帽子は以前のままだが、どこからひつぱり出して来たのか、古ぼけたモンペをはき、光男が去年海岸で着たアロハ・シャツを羽織り、軍手をはめ、ゴム長をはいて、トーモロコシのあいだでクワをふりまわしている姿は、どう見てもブラジル移民だ。

光男は着換えするのも忘れて、座敷から裏庭にとび出して行つた。

「おいおい、どうしたというんだ？　正気の沙汰とは思えないぜ」

美和子さんはケロリとした顔で、

「あら、あたし、正気よ」

正気かもしれないが、肩で息をついているし、青ざめた額からは汗の玉が流れ落ち、下腹部の球体は熟しすぎたカボチャのように、モンペの裂け目からはみ出している。

「いつたい、何の真似だ？」

泣きたい気持で、光男はどなりつけた。
「もう九ヵ月目が一週間もすぎたのだぜ。無理をしてはいけない。もつと理性をはたらかせろ！」
「あたし、頭を休ませるために、からだをはたらかせているの。その方が理性的よ」
「頼む。〝妊娠から出産まで〟をもう一度読んでくれ。ダンスさえもいけないと書いてあつたではないか」
「読んだわ、適度な運動が安産のもとと書いてあつたわ。でも、あたしはダンスはいたしませんから、あなたは夢野歌代とダンスなさい」
「夢野歌代の話じやない。君のからだのことだ。高いところに手をあげてもいけないし、下腹部に力を入れすぎる運動は避けなければならぬと、〝妊娠から出産まで〟に書いてあるじやないか」
美和子さんは悲しそうに答えた。
「あの本は、あまり信用できないの」
「どうして？」
「だつて、下腹部に力を入れてはいけないと書いてあつたので、あたし、トイレでなるべく力を入れないようにつとめたの。そうしたら、あたし、便秘になつてしまつたの。悲しいわ！」
光男はしばらく言葉が出なかつた。
「弱つたな」
「ええ、あたし、とても弱つたの。それで、お父さんのすすめに従つて、畑仕事をはじめたの。

とても工合がいいのよ」
「適度な運動は必要だ。しかし、こんな手荒な重労働はやめたまえ。あと一週間も、クワをふりまわして見ろ。きつと流産か早産だ」
「縁起でもない！」
キュウリ棚のかげから、光右衛門老人がはい出して来た。「何が流産や？　何が早産や？」
光男は老人の汗だらけ、泥まみれの顔をしばらく見つめていたが、
「お父さん、新鮮な野菜も結構ですが、僕たちの赤ん坊はキュウリやカボチャには代えられません」
「だれがわしの孫をカボチャと代えると言つた？　話をはぐらかしてはいかん。お前は流産とか早産とか縁起でもない言葉を美和子の前で口に出した。それがいかんと言うておるんや」
「畑仕事は妊婦には無理だ、と僕は言つているのですよ」
老人は頑固に首をふつて、
「すこしも無理なことはない。お前の母親がお前を生んだ時には……」
「その話は、もう何度も聞きました。ここは飛驒の高山とはちがいます。美和子は畑仕事にはなれていません」
「なれていないから、ならしておるんや。キュウリもつくれんような嫁に、元気な赤ん坊がつくれるはずはない」
「お父さん、美和子は僕の妻です」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.